春の足音は鎮魂曲

ドラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の足音は鎮魂曲

【Ｎコード】

Ｎ３０５５Ｙ

【作者名】

ドラ

【あらすじ】

４年前の事件によって死んだ2人の男と女。再びあの頃の仲間が集まった時、事件の意外な真相が明らかになる。北海道の小さな村を舞台に生命の尊厳を謳う青春小説。

序章

序章

「もう3年になるんだな」
「そうですね」
北海道雪白村。自分の生まれ育った土地に戻ってきたのに頭に浮かぶのは一つ、あの日死んだ一人の友人ーいや、そう思っているのは自分だけだろうか。あいつから見れば自分はー。
「どうだ。もう気持ちの整理はついた頃か？」
恩師である深沢利治とは駅で待ち合わせる約束だった。お互いに几帳面な性格だから再会は約束の時間の３０分以上前になった。
「そうですね。完全に吹っ切れたと言えば嘘になりますが・・・」
「あれは誰の責任でもない。しかしさすがに早く来過ぎたな。バスが来るまで1時間以上あるぞ」
じゃあ、約束通り来ても３０分以上待つ事になってたじゃないか。そう思ったが口には出さなかった。
ここ雪白駅からバスで２０分ほど行った場所にある墓地。そこが俺達の目指す最初の場所だった。俺、賀川荒太にとって一番大切な女性と彼女の命を奪った男ーいや、そう思っているのは自分だけだろう。そうに違いないーの墓参りから済ませておこうというのが深沢先生の提案だった。
「時間が止まってるみたいですね。この村は。ファミレスもコンビニもないなんて東京じゃ考えられない」荒太はそう言って苦笑した。
「卒業して東京に行ってどうだい？都会での暮らしは？」
「刺激があっていいですよ。もともと夢持って上京したんですから。ちょっと寒いですね。駅の中入りませんか？少しはマシでしょう」
「それもそうだな。ああ、そういえば今日、北条君も来るぞ。君には言ってなかったけどな」

「えっ？本当ですか？代表して俺と先生の２人で行くって聞いてましたけど」
北条敦也は同じ弓道部のエースだった男である。ちなみに自分は部長で深沢先生は週に１度だけ練習を見に来てくれるコーチのような存在だった。
「私もそのつもりだったんだがね。あまりぞろぞろ行くのもどうかと思うからな。まあ、１秒でも早く君に会いたかったんじゃないかな。絆ってのは遠くはなれても簡単に壊れたりしないもんだよ。君らは親友だったからな。おっ、噂をすればだよ」
先生の指差した方を見ると確かにそれらしき人物が近付いてきていた。一応、黒系統の服装だがかしこまった様子ではない。それは荒太も同じ事だが。
「うおー、敦也ー、久しぶりー」
「イエーイ」
なぜかハイタッチから始まる２人。
「てか、お前、すげー髪だな。さすがに東京行ってバンドやってるだけの事はあるな」
敦也の言う通り荒太は髪を真っ金金通り越して銀髪に染めている。そして東京でバンドやってプロを目指してる。
「でも、それ以外は変わってないな。いやあ、懐かしい」
「お互い様だろう」そう言って笑ったあとで今、気が付いたかのように「あっ、先生もお久しぶりです」
「うん、本当に君は何も変わってないみたいだな」先生は目を細めてそう言った。
「ところで２人ともいつからここにいるんですか？俺も２０分前は早過ぎたかと思ったのに」
「１０分以上前からいる」
「でもバスが来るまではまだ５０分以上あるらしいぞ」
「えっ、じゃあ約束通りに来ても３０分以上待つ事になってたじゃないですか」こいつは口に出した！

「君の遅刻を計算に入れてるんだよ。いつもは時間にルーズなくせになんで今日に限って」
「それはやっぱり荒太に１秒でも早く会いにーって雪降ってきましたねタクシーで行きませんか？５０分も待ってたら荒太が凍死しますよ。北海道の寒さからはかけ離れた場所から来たんですから」東京だって冬は寒いのだが一応の優しさは示してくれた。昔からそういう奴だった。若干、恩着せがましい所も変わってない。
「まあ、そうだね。先生、タクシーで行きましょう」そう言うと先生も頷いた。見た目は若く見えるが先生ももう６０過ぎだ。
「それにしても卒業してから3年、蓮井さんが死んでから４年になるのか。ちょうど今頃、２月頃だったからな」敦也がそう言うと３人の間にしばしの沈黙が流れた。
　後悔の念が強い分、荒太にとっての青春は苦い思い出になってしまっている。でも忘れてはいけない。覚えていなければいけないのだ。
「あの頃の比奈子の支えに自分はなれてなかったんだなって、そう思うと墓参りする気にはなれなかった。あいつに合わす顔がないって」
「多分、そう思ってんのお前だけじゃねえぞ。ほら、タクシー来たぞ。あれ乗ってこ」
　粉雪が辺りにちらつく中、俺達は蓮井比奈子と彼女が「殺した」男の眠る墓地へ向かった。

第1章－1

第1章

1

比奈子とは幼稚園からの付き合いだった。最初は家が近かったという理由からの家族ぐるみの付き合いだったが小学校に入学する頃には純粋に友達として仲良くなっていた。

比奈子はもともと大人しいタイプの女の子で1人で絵を描いたり本を読んだりするのが好きな奴だった。かと言って友達が少なかったわけではなく、むしろ誰からでも好かれていた。ただ大勢で騒がしくするのが苦手だっただけだ。

荒太も小学生の頃はそういうタイプだった。音楽好きだった両親の影響で幼い頃からピアノを習わされていた。「されていた」と言っても嫌々やらされていたわけではない。荒太自身、「音楽」という色も形もない芸術に不思議な魅力を感じていた。

ただ小学生ともなれば自然に男子と女子の間に垣根はできてくる。2人とも幼稚園の頃のように一緒に遊んだりお喋りしたりといったような事は少なくなっていた。

ちなみに関係ないが―いや、関係あるか―比奈子は美少女だった。かくいう荒太もなかなかのルックスだったのだが、いかんせん運動が苦手だったので女子にはモテなかった。勉強はできるのに不公平だと荒太は思っていたが、そのぐらいの年代だと勉強ができるよりスポーツが得意なほうがモテる。

そんな荒太と比奈子だが5年生のクラス替えで初めて同じクラスになった。2人の関係は良好だった。昨日見たテレビがどうだとか最近読んだ本がどうだとか聴いたCDがどうだとかの雑談はたびたびした。まだ異性として特別な感情はなかったと思うがお互いに大切な存在だったとははっきりと言える。

中学に入ると比奈子は美術部に、荒太は科学部に入った。別に科学に興味があったわけではないが特に他にやりたい事があったわけでもなかったので入部した。こういうと科学部に失礼な気もするが実際そういう理由でやってた人はたくさんいた。

その代わり荒太の中で音楽というものへの情熱は異様なほど高まっていた。きっかけは中2で同じクラスになった友達のその友達のお兄さんが文化祭でライブをやるから一緒に見に行かないかと誘われた事だった。

その友達の友達の兄、略して友友兄は高校の軽音部でかなり派手なバンドをやっていた。名前を言えば誰でも知っているであろうバンドのコピーが中心だったがなかなかハイレベルなライブだった。

荒太はこれだ―いや、これしかないっと思った。ロックである。ギターをかき鳴らしながらシャウトする友友兄こそが自分の理想像だと。

即行でエレキギターを購入した2万くらいの安物だったが中学2年にしては大きな買い物だった。

「俺、ギターがんばるよ。ピアノも好きだけどこっちの方が合ってる気がする」両親にはそう言った。特別、反対はされなかった。別に本気でプロのピアニストにさせたかったわけでもないらしい。

比奈子のほうはというとこれはもう天才としか言いようがない。こちらは本気で画家を目指してもらいたいくらいいろんなコンクールで様々な賞を総なめしていた。

2人とも脇目もふらず信じた道を突き進んでいればよかったのかもしれない。そうすればあんな「事件」を起こす事もなかった。

第1章ー2

2

高校受験はそれほど苦しかったという記憶はない。

「荒ちゃんも雪白高校受けるの？」

比奈子は荒太の事を「荒ちゃん」と呼ぶ。幼馴染なのだから別に不思議な事ではないし荒太自身、中性的な顔立ちだったからしっくりくる呼び方だった。

雪白高校は地元では有名な進学校である。2人共通っている塾は違ったが成績は優秀なほうだったので自然な選択だった。ちなみに友友兄も雪白高校の卒業生だった。自分とは3コ上にあたる。工業系の標準以上の偏差値の大学に進んだらしい。

北条敦也と出会ったのはちょうど部活を引退して塾に通い始めた頃だった。たまたま隣の席に座ったというだけだがなんだか最初から気が合った。敦也は中学の頃から弓道部だったらしい。荒太の中学には弓道部が無かったので敦也は物珍しい存在に思えた。

「賀川君も雪白高校受けるんだろう？だったら一緒に弓道やろうぜ」そう言うと敦也は弓道という競技の魅力を熱く語り始めた。最初はなんとなく聞いていた荒太だったがだんだん興味が沸いてきた。そもそもクラブ活動なんて物は勉強以外で努力できるフィールドが欲しい人がやる物でそれがサッカー部だろうが軽音部だろうが弓道部だろうが関係ないのだ。自分の青春は音楽6、勉強2、弓道2くらいになるのではないかと漠然と設計し始めていた。

しかし偶然というのはおかしな物でこれと全く同じ事が比奈子の身にも起きていたのだ。

「比奈ちゃんも雪白高校受けるんでしょ？だったら一緒に弓道やろうよ」そう言ったのは滝川紗紀という荒太達とも敦也とも違う中学に通っていた女子である。運動嫌いな比奈子も弓引くくらいならできるかもと興味を持ったらしい。こちらは弓道6、勉強2、絵2く

らいだろうと想定した。
「絵が６じゃないのか？」と荒太は聞いたが「私、絵は１人で自由に描くほうが好きだから」とは当時の比奈子の弁。
かくして４人とも見事、雪白高校に合格し波乱万丈な青春時代が始まる次第である。

第1章ー3

3

高校生活が始まったばかりのピカピカの1年生に待ち受けているのが部活の勧誘である。もっとも荒太にとっては軽音部と弓道部にしか興味がなかったのでまず手始めに軽音部の見学に行った。が、若干、期待を裏切られた感はあった。第一にレベルが低い。荒太は中2からギターを始めたわけだが明らかに3年生のそれより自分のほうが上手い。第二に先輩方、みなさんオリジナルでやってる人がいなかった。もちろん練習としてやるならコピーは重要だし趣味としてやるならコピーだけでも十分だろうが荒太はできればオリジナル中心のバンドが組みたかった。実際、荒太には中学時代から書き溜めたレパートリーが20曲ほどあった。まあ、自分から誘えば乗ってくる人もいるだろうと考えて入部するかどうかは一旦保留にした。

翌日は弓道部に体験入部。弓道という競技は最初から的に向かって打たせてもらえるわけではないという事は敦也から聞いていた。まずは巻藁という藁を束ねた物に向かって打つ練習から始める。巻藁は射場に4つ用意されていたがそこには敦也と比奈子の姿もあった。彼らは昨日も来ていたらしい。

「これが上手くできるようにならないと的前には立たせてもらえないらしいよ。テストに合格しないとだめなんだって」他にも体験入部に来ている人は10人ほどいて自分の番を待ちながら比奈子はそう言った。それも敦也から聞いていた。もっとも経験者である敦也と比奈子の友達だという滝川紗紀はすぐに合格する事になるのだが。

「どうする？荒ちゃん入る？」帰りのバスの中で比奈子が聞いてきた。

「うーん、とりあえず入ってみてつまんなそうだったら辞める。今んとこおもしろそうだとは思わないけど」曖昧に答えたつもりだっ

たが「そうだよねえ。私もそんな感じだなあ」と比奈子も頷いた。
ちなみに比奈子は一応、美術部も覗いてみたらしい。だが雪白高校はもともと文化部が盛んでなく美術部もいかにも地味な女子４名しかいなかった。それでも中学時代、数々の賞を根こそぎ受賞した比奈子の雷名は彼女らの耳にも届いていたようで熱烈に入部を懇願されたそうだ。もっとも比奈子は「私、絵は１人で描くほうが好きなので」と荒太に語ったのと同じ理由でやんわりと断ったらしい。
２、３回の体験入部で結局２人とも弓道部に入部した。軽音部のほうは入らない事にしたが１人だけ趣味が合いそうな奴がいたのでそいつとは仲良くなった。名前は大津圭一といって荒太は「パトス」というバンドが好きだったのだがその大津君も大ファンだったらしくすぐに意気投合したわけである。ちなみに大津君のほうは軽音部にも喜び勇んで入部した。「だってバンドやってりゃモテるじゃん」とはっきり言われた時は荒太も苦笑するしかなかった。
一方、先輩達から聞いた話では雪白高校の弓道部はかなりの強豪らしい。知らずに入部した荒太もどうかと思うが実際、全国大会にも何度も出場してる常連校なんだそうだ。そのため普段の練習もかなり緊張感のあるものだった。敦也も最初のうちは少し戸惑っているように見えた。というのも中学時代の敦也の所属していた弓道部は世間一般でいう卓球部的存在でどちらかと言えば地味で馬鹿にされる部だった。実際、真剣に弓道に取り組んでいたのは自分だけだったと敦也は愚痴をこぼしていた事がある。それだけに高校での弓道部生活はやりがいのあるものになりそうだと嬉々と語っていた。
比奈子のほうもなんだかんだと言いながら弓道という競技にハマっていた。１ヶ月程で巻藁テストに合格すると練習が終わった後も残って滝川さんと共に１時間ほど矢を打ちまくっていた。
弓道を少しでもかじった事のある人ならわかると思うがこれがなかなか残酷な競技なのである。まず過程と結果が悲惨なほど比例しない。普通どんな競技でも練習すればするだけある程度は上達するものである。だが弓道にはそれがない。それほど練習しなくても当て

まくる人もいる。逆に人一倍、練習してもそれほどの成果が得られない人もいる。比奈子は確実に後者だったが実は意外に性根が負けず嫌いなのである。「努力は必ず報われる」と信じて疑わない奴なのである。

肝心の荒太はというと弓道を楽しんではいなかった。それはそうか。遊びでやってるわけではないのだから楽しくはなくても当然だ。その代わり音楽のほうは楽しくて仕方なかった。じゃあ、音楽は遊びだったのかと言えばそうでもない。というか何事も真剣にやったほうが楽しいものだ。

「路上ライブをやってみないか？」と大津君に誘われたのである。荒太はライブというと中学時代に文化祭で一度やったきりであった。その時は誰もが知ってるバンドの誰もが知ってる曲を2曲やっただけだがなかなか達成感があった。ちなみに荒太はギターボーカルだった。

荒太は二つ返事で「ぜひやりたい」と答えた。その日から3時半まで授業、4時から6時まで部活、それから夜の街に繰り出してライブという毎日が始まった。ライブはパトスのコピーと荒太のオリジナル曲が中心だった。グループ名は「パルス」にした。もちろんパトスから取ったわけだがグループ名をつけた事自体、自己満だったから特にこだわりはない。

だがライブは自己満では終わらなかった。予想以上にお客さんが集まってくれたのである。特に荒太のオリジナル曲がなかなか好評だったのが嬉しかった。そのうちもっとちゃんとしたライブハウスで本格的にやりたいと思うようになっていた。

「荒太君、なんか本気でプロ目指してみたくない？」荒太は端からそのつもりだったがその想いはより強くなっていた。

第1章－4

話は前後するが深沢先生に初めて会ったのは本入部した翌日の事である。「毎週木曜日に来てくれる事になってるの」と先輩から聞いていた。5月に入り体験入部の期間が終わると改めて先生からの挨拶があった。先生曰く弓道において一番大切なのは「感性」だと言う。美しい物を美しいと感じる心があるかどうかだと。「もちろん最初のうちはなんの事だか分からないとおもうけど」と再三念押していたが新入部員の数は荒太達を含めて男子9人、女子15人。まあ、例年通りといったところらしい。その全員が巻藁テストに合格する頃には荒太は深沢先生から一目置かれる存在になっていた。先生が言うには荒太は実にいい「感性」をもっているらしい。射を見ればそれが分かるのだそうだ。

なるほど弓道をやると感性も磨かれるのか。荒太はそう解釈した。そうしたら音楽をやっていく上でもプラスになるじゃないか。荒太はさらにそう都合よく解釈した。

かと言って的にバンバン当てまくっていたわけではない。なるほど感性と的中率は関係ないのか。荒太はそう解釈した。逆に敦也はバンバン当てまくっていた。敦也の感性はどのような物なのかと思ったが考えてみれば中学時代から全国に行った事もあるほどの実力者なのだ。初心者の荒太とは根本的に違って当然だ。努力しないでもそれなりの結果を残すより、努力してそれなり以上の結果を出すほうが断然かっこいい。敦也はヒーローの素質十分なのである。

しかし充実した日々は唐突に終わりを向かえる。ある日、比奈子が1人の男子部員を射殺してしまったのである。

第2章ー1

第2章

1

「でもさあ、荒太とは割りにメールやら電話やらしてたからあんまり久しぶりって感じしないんだよな」唐突に身も蓋もない事を言い出す敦也

「そりゃあ、まあな。てか、お前、さっき俺が銀髪にしてた事、驚いてたけど一回写メ送った事あったよな」荒太もまた冷静に対応する。

「生でみると余計に驚くんだよ」まあ、そんなもんか。

「ところでさあ、お前と蓮井さんて付き合ってたの？」

「いや、付き合ってはいなかったよ。というか『付き合う』の定義がよくー。毎朝一緒に登校するのは付き合ってるって言う？」

「言うね」

「2人で映画観に行くのは？」

「言うね」

「バレンタインにチョコもらうのは？」

「確実に付き合ってるね」

「でも義理だったかも」

「手作りだったか？」

「ああ、手作りだったな」

「確実に本命だね」

「というか2人共ね」深沢先生が割り込んできた。

「お互いに好き合ってればそれでいいんだよ。形なんて関係ない」

若干、古臭いが含蓄のある言葉！

　そんなこんなで目的の霊園に到着した。「お金は？」「いいよ。私が払うよ。教え子と割り勘てわけにもいかんだろ」そう言って3

人はタクシーから降りた。
「どっちからにする？蓮井さんからか？」敦也がそう聞いた。「というか俺はどこまで踏み込んでいいのかな？荒太にとってどこまで忘れたい事なのかなって」遠慮がちに聞かれたがそれは荒太にとっても実に微妙な質問だった。
上園明―それは部活中の事故で比奈子が死なせてしまった男である。射場に現れた蜂に怯えて矢道―矢の飛ぶ道、すなわち矢を射る場所から的のある場所の事である―に飛び出してしまった大バカヤローである。そこにまさに一瞬の間に比奈子の矢が飛んできたのだ。運が悪かったとしか言い様がないが矢は上園の心臓を貫いた。即死である。本当に上園は大バカヤローだ。死んだ人を悪くは言えないが上園一人の死がどれほど多くの人間を不幸にしたか、それを思うと誰かを憎んでいないと荒太は壊れてしまいそうだった。
「俺はあの蜂を恨む事にしてるよ。それが一番いいと思って」敦也はそう言った。確かにそれも一つの手だ。
事故があったのは高2の夏合宿が終わってすぐの事。先輩達も引退してやっとそれぞれ自分なりの弓道というものを見つけ始めた頃である。荒太は部長になっていた。根が真面目だったからだろうがいわゆるキャプテン的な存在ではない。どちらかと言うと事務的な作業を任される面倒な役回りだった。それも短い間だったが。
幾度の話し合いの末、弓道部は無期限の活動停止という事になった。敦也や滝川さんなどは続けさせて欲しいと直訴したのだが死人が出てしまった以上、学校としても受け入れるわけにはいかなかった。仕方のない話である。
比奈子が死んだのは事故から半年後、2月の終わり頃だった。近所の公園の木で首を吊っている死んでいるのを帰宅途中のサラリーマンが発見したのである。翌日、全校集会でその事が伝えられたが死因、死亡推定時刻、自殺の理由など警察が調べるような事は全て伏せられた。遺書は残っていなかった。だが罪の意識に耐えられずの決断だったのだろうというのが大方の推測だった。

「比奈子の事は好きだったから—大好きだったから忘れたくない。どうして—どうして死んじまったんだよ・・・比奈子」墓前で手を合わせながら嗚咽交じりの言葉が漏れた。

上園の墓にも手を合わせた。だが荒太は彼になんと言葉をかければよかったのだろう。生前の上園とは特に深い仲ではなかった。「一緒に部活をやっている人」という程度、好きでも嫌いでもなかった。

「こいつにも家族がいて友達がいたんだよなって思うんだよ。その人達は比奈子の事をどう思ってたのかな」荒太は誰に聞くという風でもなくつぶやいた。

敦也も先生も答えなかった。比奈子自身は恨まれていたと思っていたのかもしれない。だが上園の葬儀に参列した比奈子の両親に対して上園の両親は「全く恨んでない」と断言してくれたそうだ。逆もまた然り、比奈子の両親も上園に対して贖罪の念こそあれ全く恨んではいないと断言した。

「さあ、そろそろ行きましょう。6時からですよ」敦也が言った。

荒太が北海道に帰ってきた理由は3つある。1つは墓参り、2つ目が同窓会で弓道部一同集まる事になっていたのである。

第2章―2

2

「ところで今日の同窓会って何人くらい来るの？」バスに揺られながら荒太が聞いた。

「後輩と先輩も結構来るから全部で３５人」

「ひょえー」荒太は素っ頓狂な声を出した。「高校卒業して他所行った人も結構いるんだろ？それで３５はすごいな。」

「みんなお前に会いたがってんだぞ。自覚ないとお前、地元じゃそれなりにホープなんだからな」

「アッハッハ」

「アッハッハじゃねえよ」インディーズシーンじゃすげえ人気になってんだろ？これでメジャーデビューでもしてみろ。今日だって『サインもらっとこうかな』とか言う奴、絶対いるぞ」

弓道が出来なくなってから荒太は一層、音楽に打ち込むようになっていた。圭一―その頃には「圭一」と呼ぶようになっていた―と共にメンボサイトでリズム隊を探して４人組のバンドを結成した。バンド名は「エートス」にした。かと言ってこのバンドをパーマネントに続けるつもりはなかった。高校を卒業したら東京に行って音楽の専門学校に入る。そこで本格的にバンドを組んでプロを目指す。エートスはそれまでに経験と実力をつけるためのつなぎのつもりだった。実際、リズム隊のユラとカーキ―本名は最後まで教えてくれなかった―は完全趣味思考だったし普通に下手だった。

それでも荒太のカリスマ性で地元ではなかなかの人気者になっていった。ライブもちゃんとしたライブハウスで出来るまでになっていた。もちろん荒太を動かす活力になっていたのは比奈子の事だった。事故があってからの比奈子は完全に自暴自棄に陥っていた。学校も休みがち―というか完全に不登校になり部屋に閉じこもるようになった。食事もままならず声を押し殺してすすり泣く声を家族は

何度も聞いたという。
　そんな比奈子を元気づけたかった。自分までクヨクヨしてちゃだめだとそう思っていた。それでも比奈子は死んでしまって今度は荒太が自暴自棄になる番だった。学校へ行って帰ってきたら食べて寝るだけの生活が続いた。圭一は荒太がいつ戻ってきてもいいように自分がギターボーカルをやってバンドを継続してくれた。
　バンドには3ヶ月ほどで復帰した。ところがベースのユラとドラムのカーキは受験があるからと次のライブでラストにして欲しいと言い出した。荒太と圭一は渋々納得してかくしてエートスは感動の（？）ラストライブを開催した。荒太は考えた。さて、これからどうしたものか？

第2章－3

「そう言えば雪白高校の弓道部、来年度から活動再開する事になったらしいぞ」先生が他人事のように言った。そう言えばこの方は普段は何をして生活しているんだろう。今更ながら考えてみると結構、謎の存在である。

「あっ、そうなんですか。そりゃあよかった。もう4年ですもんね。」敦也は心から嬉しそうに言った。

「でも敦也って大学では弓道やってないんだろ？」荒太は聞いた。

「いや、一応、入部する事はしたんだけどな。勉強のほうが面白かったんだよね。変な話だけどさ」敦也は自嘲気味にそう言った。

「いや、変ではないだろ。一流の大学行ったんだし。やっぱり一流の会社にでも就職するのか？」荒太はからかい半分で聞いた。

「いや、親父の会社継ぐ事になると思う。それはそれで意外と面白そうなんだ」敦也のお父さんはそこそこ名の知れた玩具会社の社長をやっている。「俺、意外と御曹司だからさ」敦也は自慢臭くない言い方でそう言った。

「お坊ちゃんて柄じゃないけどな」

「誰もお坊ちゃんとは言ってないだろ」敦也は笑った。

「ところで深沢先生はまたコーチやるんですか？」荒太は話を戻した。

「ああ、やらせてもらえる事になったよ。なかなか楽しいんだよ。毎年毎年、いろんな生徒が入部してくるだろ。その一人一人の射の違いを見るのが面白いんだ」

そうこういってるうちに同窓会会場の居酒屋「春さん」に着いた。6時10分、ちょっと遅刻だ。墓参りに時間を掛け過ぎた。絶対泣かないって決めてたんだけどなあ。

「地元の奴らにとってはここは飲み会の定番になってるんだよ。お前は来た事ないだろうな」敦也はドアを開けた。もうほぼ全員集ま

っているように見えた。
「おお、やっと来たぞ。主役が」「てか、すげー髪だな」「銀髪じゃんか」「これがバンドマンのオーラか」「東京行った奴はちがうな」「会いたかったー、会いたかったー（？）」「おい、だれか敦也にも触れてやれよ」「敦也は全く変わってねえな」「先生もお久しぶりです。懐かしいな」・・・エトセトラ。
ほぼ全員が一通り「久しぶり」の挨拶を怒涛の勢いで済ますと荒太は若干、圧倒されつつも返事をした。
「ひ、久しぶりです」
「と、とりあえずどっか座ろうぜ」敦也も若干、戸惑い気味でそう言った。
「おーい、ここ空いてるぜ」そう声を掛けたのは国乙三郎という上園の親友だった男である。名前は「クニオツサブロウ」と読むのだが間の2文字を取って「オッサン」という今思うとかわいそうなあだ名で呼ばれていた男でもある。
「じゃあ、とりあえず俺が行くよ」と敦也がオッサンの隣に座った。
荒太がまわりをキョロキョロしていると「ここ空いてるぞ」と低い声がした。
「あれ？吉行じゃんか。久しぶり。珍しいな。お前が飲み会なんて。学生時代は打ち上げとかほとんど欠席してたのに」荒太が側に歩み寄りながらそう言った。
「なんか飲みたい気分だったんだよ。短大も卒業して今は普通に社会人やってるよ」吉行は「フフン」と笑いながら答えた。
「というか高校時代は一匹狼気取ってたからな。大学ではどうだったんだ？」荒太は笑いながらそう聞いた。
「相変わらずぼっちだったよ。弓道も続けるつもりなかったしサークルも入る気がしなかったからな」吉行は虚しさと寂しさの会い混じった口調でそう言った。荒太はなんだか複雑な気分になった。
ここまでのやり取りではわからないと思うので補足しておくが吉行は女である。吉行一枝が本名。髪をベリーショートにし一見する

と男のようであるが実はなかなか端正な顔立ちをしている。あまり誰とでも親しく接するタイプではなかったがこちらも上園とだけは仲がよかった。上園は目立たない存在だったが類は友を呼ぶという奴で同じように友達の少ない奴からは好かれるタイプだった。
「まあ、お前も飲めよ」
「馬鹿、ボーカリストが酒飲めるか」
「ああ、そうか。お前、音楽の専門学校行ったんだよな。もう卒業したのか？」
「ああ、今はバイトしながら圭一と2人で暮らしてる」
「その頭でよくバイトできるな」
もっともな疑問だがなんの事はない皿洗いである。
「お前がギターボーカルで大津がギターだろ。ベースとドラムはどうしたんだ？」
「専門で探したよ。結構、趣味も性格も合う奴がいてな。演奏も上手かったし」
「バンド名は？」
「『ノクティルカ』英語で夜光虫っていう意味なんだけどな。響きもいいしバンドのイメージとも合うと思ってさ。明るくもあるし暗くもあるだろ」
そこで荒太は野菜スティックに手を伸ばした。普段から少食の荒太は割り勘だといつも損をする。
「今日、比奈子と上園の墓参り行ってきたんだけどな。結構、頻繁に手入れされてる感じだったぞ」
「そりゃあ、家族は頻繁に参ってるだろ。ところでバンドの事なんだけどさ」
「ああ」荒太はなんだか話をはぐらかされたように感じた。
「今のうちにサインもらっとこうかな」誰かしら言うだろうと思ってたがこいつに言われるとは。
「冗談だよ」こいつでも冗談なんて言うのか。
「お前って比奈子と仲良かった？」

「なんだよ、唐突に。まあ、同情はしてるよ。でも死にたいほどつらい思いするくらいなら首吊ったほうがマシだろ。なんとなく想像は出来るよ」

「―」荒太は何か違和感を覚えたがその正体には気付かなかった。

第2章－4

宴は2時間程続いたが荒太は移動する度に質問攻めにあった。ほとんどがバンドの事だ。なるほど荒太は確かに雪白村のホープであるみたいだ。

「ジャンルはどんなのやってんの？」

「基本はハードロックだな。でもいろいろやってるよ。バラードもポップも」

「曲は全部荒太が書いてるんだろ？」

「いや、圭一が作った曲もあるよ」

「どうでもいい話だけど『大津圭一』っていう名前、略すとＯＫだよね？」

「本当にどうでもいい話だな。でも本人それ言われるの結構不快らしいぞ」

そこでまた野菜スティックに手を伸ばす。今日、これとポテトしか食ってないぞ。なんだか食欲がない。また席を移動する事にした。ほとんど立食パーティーと化している。

「荒太君は2次会―いや、3次会か。カラオケは行くの？私、荒太君の生歌、久しぶりに聴いてみたいなあ」生歌聴きたきゃ東京に来い。荒太はそう思ったが口には出さなかった。

「お前、生歌聴きたきゃ東京行くこったな」敦也が割り込んできた。こいつは読心術を使えるのか！

「荒太はカラオケには行かないよ。明日は大事な用があるんだよな」敦也が代わりに答えた。

「なあに？大事な用って」

「玲奈ちゃんに会いに行くんだよ。なんか話したい事があるんだって」荒太は渋々答えた。

「玲奈ちゃん―ってああ、比奈ちゃんの妹の！」久しぶりに聞いた名前だったためかかなり驚いた様子だった。

比奈子には妹がいた。―蓮井玲奈―年は４つ下で今は高校２年生だ。荒太達と同じ雪白高校に通っている。もともと荒太が北海道に帰ってきたのは玲奈ちゃんから「大事な話がある」と電話があったからである。墓参りも同窓会も敦也が帰ってくると聞いて―誰から聞いたのかは謎だが―ついでに企画したものだったわけだ。

「というわけで―」敦也は「ウホン」と咳払いしてから声を張り上げた。「そろそろ時間でーす。みんな金寄越して外出なさーい。２次会は居酒屋『遊味亭』で行いまーす」

荒太は敦也にお金を渡すと早々に店を出た。雪はとっくに止んでいる。

「今日はどこ泊まるつもりなんだ？」

「いや、普通に実家帰るよ」

「あっそうか。お前んちって蓮井さんちの近くなんだよな」

「じゃあ、またどっかで会おうぜ。元気でな」

「イエーイ」

そしてハイタッチで終わる２人。

第3章ー1

第3章

1

自分ちに3年振りに帰ってきて母親の第一声は「まあ何その髪！」だった。父親の第一声も「おお、すごい頭だな！」

時間は9時ちょっと過ぎだったが「疲れてるからもう風呂入って寝るよ」と告げた。

「何だ。久しぶりに家族水入らずで晩酌でもと思ってたのに」

「だからボーカリストは酒飲めないって」

「そうその辺の話も聞かせてくれよ。そろそろメジャーデビューも間近って噂で聞いたぞ。

「誰に聞いたんだよ。とりあえず風呂だけでも入らせてくれよ。北海道寒過ぎ！」

そう吐き捨てて荒太は風呂場に向かった。

服を脱いで湯舟に浸かると今日あった事が頭の中に甦ってきた。同窓会は楽しかったがやはり墓参りの記憶のほうが強い。比奈子の事を考えるとまた涙が出そうなのでやめた。

いや、無理だ。考えまいとすればするほど考えてしまう。

「ふえーん」我ながら情けない声が出た。

それにしても玲奈ちゃんの事が気になる。大事な話・・・なんだろう？

玲奈ちゃんと最後に会ったのは3年前だから中学2年生の頃だ。まだまだあどけない少女の印象しかない。

「ザブーン」荒太は頭から湯舟に潜った。特に意味はないがそうしたい気分だった。「ふえーん」また変な声が出た。

気付いたら30分以上入ってた。さすがに湯中りしそうなので湯舟から出た。

Tシャツにセーターというラフな格好になってリビングに入ると2人して飲んでた。自分達だけでも飲むつもりだったのか。
「おお、やっと出たか。ところでお前、風呂場で変な声出してなかったか？」
外まで聞こえてたかと恥ずかしくなったがそこはごまかした。「いや、別に近所の野良猫かなんかじゃないか？」
「まあ、そんな事よりな。お前が東京行くって言った時にはな父さんも母さんも父さんも母さんも特に反対はしなかったけど心から賛成も出来なかったんだ。東京は怖いっていうイメージがあったからな」
「それは本当にただのイメージだよ。実際、怖くもなんともない」
「そうか。それならよかった」父さんは心底安心した風だった。
「圭一君も元気でやってるか？それからベース君もドラム君も。そうだ。名前くらい教えてくれよ。」
「ベースは外村信二、ドラムは今野正美」大した情報ではない。実際、父さんも「そうか」としか言わなかった。
「ジャンルはロックだろ？」
「基本的にはね。でもいろいろやってるよ。バラードもポップも―」荒太はほんの数時間前にした会話を反復している自分に気付く。
「まあ、それはともかく話変わるけどな」変わるのか。
「明日、玲奈ちゃんに行くんだろ？」そうだ。そっちのほうが重要な話だ。
「玲奈ちゃん、お姉さんに似て美人になったのよー。会ったら言ってあげて！」今まで黙々と飲んでいた母さんが口を挟んだ。
なんとなく想像はつく。だめだ。顔見たらまた泣いてしまいそうだ。

第3章ー2

2

翌日、約束の14時の5分前に蓮井宅に着いた。出迎えたおばさんの第一声は「まあ、すごい頭ね」親友ともかつての仲間とも実の親とも変わらない。「久しぶり。よく来てくれたわね。とりあえず上がって上がって」

「玲奈ちゃんは？」

「ああ、ごめんなさいね。まだ部活から帰ってないのよ」

「部活って何やってるんですか？」

「テニス」

「ああ、中学でもそうでしたね」

しばらくおばさんと談笑していると「ガチャッ」というドアが開く音と共に「ただいまー」という声が聞こえてきた。

「わっ、荒ちゃん、ひさしぶりー。びっくりしたあ」

「おー、玲奈ちゃん、だいぶ変わったね。雰囲気が」

「いや、こっちのセリフだよ」

玲奈ちゃんは荒太の事を「荒ちゃん」と呼びタメ口で話す。昔からそうである。なるほど確かに目鼻立ちは比奈子に似てきているが髪がショートなぶんボーイッシュな印象がある。

「ごめんね。ちょっと部活が長引いちゃって。着替えてくるからちょっと待ってて」

そう言って2階の自室に向かった玲奈ちゃんは3分ほどで降りてきて「ここじゃ話せないから上がって」と告げた。

荒太はおばさんに目配せして「じゃあ」と一言だけ言って玲奈ちゃんの部屋へ上がった。

「そう言えば比奈子の部屋は―」

「あの頃のままよ。無理に片付ける事もないじゃない？」

「それもそうか」

しばしの沈黙が流れた。お互いにどちらから切り出すか探っているようだ。
「話って―何？」
「大した事じゃないの。うん、実は吉行さんの事なんだけどね」
「吉行？吉行一枝の事？」意外な名前が出たので驚いた。
「そう」玲奈ちゃんは伏し目がちに頷いた。
「この前、電話でね。話したい事があるってすぐそこの公園に呼び出されたの。それで、うーんと、何から話せばいいのかな。荒ちゃん、吉行さんと上園さんが付き合ってたって知ってた？」
荒太はギョッとした。
「付き合ってた？あの2人が？いや、知らないよ。初耳だよ」
「そうなんだ。やっぱりみんな知らないんだ。それでね、上園さんが死んでからあの人ウツビョーになっちゃったんだって」
「ウツビョーってあの『鬱病』？」
「そう、あの鬱病。それでずっと一人で苦しんでたんだって」
荒太は意外な気がした。あの気が強い吉行が鬱病―。
「それでね、その苦しみ―悲しみがお姉ちゃんへの憎しみに変わってちゃったんだって」
荒太は嫌な予感がした。
「それでね、お姉ちゃん、本当は自殺じゃなかったの。吉行さんが殺しちゃったんだって」

第3章ー3

荒太は人生で最も衝撃を受けた気がした。そして自分の耳を疑った。
「えっ、殺した？吉行が？比奈子を？」
玲奈ちゃんはコクッと頷いた。
「さ、最初から順を追って話してくれるかな？」
「わかった」そう言うとポツリポツリと話し始めた。
「吉行さんてすごく不器用な人でね。子供の頃からなかなか友達ができなかったんだって。上園さんもそう。だから2人はすぐに意気投合したんだって」
「そこまではわかるよ。でも恋愛感情なんかじゃないと思ってた」
「確かにそうよね。でも吉行さんて実はすごい美人でしょ？上園さんが異性として好きになってもおかしくなかったと思うの。それで上園さんのほうから告白されたらしいの。確か1年の8月頃だって言ってた」
8月というと合宿あたりで仲を深めたという感じだろうか。その辺は想像するしかないだろう。
「それで2人は付き合い始めた。でもあんまり公にはしたくなったんだって。私は隠すような事でもないと思うけど。上園さんてね、すごく繊細な人だったらしいの。普段はあまり感情を表に出さない心の中では泣いたり笑ったり。それは吉行さんにも言える事だと思うけど」
「わかる気がするよ。深い川ほど流れは穏やかって言うからな。ごめん、変な口挟んだ。続けて」
「うん。それでそこから話は飛ぶけどね。あの事件があったでしょ？その日から吉行さん、食事も喉を通らないくらい落ち込んじゃったんだって。しかもそれを誰にも相談できないって事がどれほど辛い事か私には想像も出来ない」
「俺にも出来ない。家族は吉行が上園と付き合ってたって知ってた

のか？」
「知らなかったんだって。部活の仲間だって事くらいしか。それでそれにしては余りにも落ち込み方が激し過ぎるって思って問い質したらしくて。そこで初めて打ち明けたんだって。家族も最初はどうしたらいいかわからなかったみたいで。とにかく心療内科に行くように勧めたの。そこで鬱病だって診断されたの」
「普段からあんまり人と関わらない奴だったからな。俺も含めて周りの奴ら誰も気付かなかったわけか。なんだか情けないな」
そこで2人とも一呼吸置いた。
「それでそこから吉行が比奈子に殺意を抱くまでの過程がわからない」
「たぶん本人にもわからなかったんじゃないかな。ただ何かを―誰かを憎んでいないと自分を苦しめ続けるしかなかった」
荒太はそこで深沢先生の言葉を思い出した。比奈子を亡くして憔悴しきっていた頃の話だ。
「人間にとって一番幸せな事はね、賀川君。自分を好きでいられる事だよ。君が蓮井君の支えになれなかったと自分を責めているとしたら、それは人間にとって一番不幸な事だよ」
今の俺は自分が好きだろうか。なんだか不思議な気持ちが込み上げてきて涙がこぼれそうになるのを必死でこらえた。
「それで2月の終わりご頃、ちょうど今頃よね。吉行さんが近くの公園に呼び出されたの。お姉ちゃん、外出する気力なんてなかったと思うけど『どうしても用がある』って言われれば断れない性格だったからね。そこで―後ろから首を絞められて殺されたの」
なんかの本で読んだ事があるぞ。確か後ろから上手い具合に―本当に疎覚えだ―締めると首吊りと同じ状態になるって。
「それで手頃なきの枝に吊るしたんだって。これが事件の真相」
最後はサラリとまとめた。サラリとし過ぎててリアクションに困った。
「でも―」荒太は思った事を口にした。

「それがどうしたって言うんだよ。今更、比奈子は殺されたんだって聞かされて何がどう変わるんだよ」荒太は若干の怒り口調で言った。
「そもそも吉行さんがなんでこんな事を4年も経ってから私に打ち明けたのか、それはわからない。警察に言おうかとも思ったけど負の連鎖をこれ以上、広げたくなかった。それでお姉ちゃんが生き返るわけでもないし。でも私一人じゃ抱えきれないから荒ちゃんには話しときたかったの」
「吉行に口止めはされなかったのか？」
「ううん、されたよ」
荒太は拍子抜けした気がした。
「でも私、思うの。ほら、私、今年17になってお姉ちゃんの年に追いついちゃったでしょ？だからもう全部吹っ切っちゃおうって！」
口で言って簡単に吹っ切れるなら荒太もとっくにしてる。でも幼馴染と実の妹とでは勝手が違うのだろう。
「それとね、荒ちゃんに帰ってきてもらった理由、もう一つあるの」
そう言うと玲奈ちゃんは立ち上がって壁に飾ってあった一枚の絵を手に取った。荒太もさっきから気になっていた物だ。
「それって確か比奈子が生前、最後に描いたっていう確か、えー、タイトルは―」
「『春の足音』ずっとここに飾ってあったんだけどね。これ、荒ちゃんに受け取って欲しいの」
それは寒い冬に耐えながら春の訪れを今か今かと待ち焦がれる、そんな時期の桜の木を描いた絵だった。
「え、なんでまた？大切な形見だろ？」
「うん、そうなんだけどね。私、これがあるといつまでもお姉ちゃんから卒業できない気がするの。それにお姉ちゃんも荒ちゃんの傍に飾ってもらったほうが喜ぶと思うんだ。お姉ちゃん、たぶん荒ちゃんが思ってる以上に荒ちゃんの事、大好きだったんだよ。お姉ちゃん―」

玲奈ちゃんの目から涙があふれた。数秒の後、それは号泣に変わった。荒太も思わずもらい泣きの涙が出た。

「無理に—無理に吹っ切ろうなんて思わなくていいんだ。逆にいつまでも覚えててあげよう。それで比奈子のぶんも俺達は精一杯生きるんだ。そのほうがいい。それが一番お互いのためにも—」

そう言ってそっと抱きしめた。そうやって2人でしばらく泣いた。

第3章－4

4

玲奈ちゃんが泣きやんでから荒太は蓮井宅を後にした。おばさんが「すごい泣き声がしたけど何かあったの？」と聞いたが「ううん、何でもないの。気にしないで」とごまかした。

自宅に帰ると「お帰り。案外、早かったのね」時計を見るとまだ3時ちょうどくらいだった。自分の部屋に戻るととりあえずベッドに身を投げ出した。

「まずやるべき事と言えば、あれだな」荒太は一人つぶやくと携帯を手に取って吉行一枝に電話をかけた。

「はい」吉行は10秒ほどで電話に出た。昨日、聞いたばかりのはずなのに吉行のローボイスに携帯を握る手が強張った。

「賀川か？何か用か？」

「いや、すごい大事な話なんだけどな。電話でいいか？」

「なんだよ。その質問。自分から掛けといて」

確かにそうだ。荒太も吉行も苦笑した。

「じゃあ、電話で言うよ。あの落ち着いて聞いてくれよ。唐突にこんな事、聞いて変に思うかもしれないけど、お前―自殺する気じゃないよな？」

「自殺？」吉行はとっさには何の事だかわからなかったようだ。だが彼女の脳味噌は恐るべきスピードで回転する。

「玲奈から何か聞いたのか？」

「何かというか全部聞いた」荒太は恐る恐る答えた。

電話の向こうで「チッ」と舌打ちする声が聞こえた。

「なるほど。それでお前はなぜ4年も経ってから打ち明けたのか疑問に思い『ひょっとして吉行は自殺するつもりなんじゃないか。そしてその前に妹の玲奈にだけは真相を告白しておこう』とそう考えたんじゃないかと、そう思ったんだな？」

飲み込みが速過ぎる。逆に荒太が戸惑った。
「そ、その通りだ。でも違うよな。違うと言ってくれ」
「じゃあ、即答する。違うよ。俺がするつもりなのは自殺じゃなくてジシュ」
「ジシュってあの『自首』？」
「そう、あの自首。他にどのジシュがあるんだよ」
「そうか、自首か。そりゃあよかった」荒太はホッと胸を撫で下ろした。
「でもなんで今更？」荒太は当然の疑問を口にした。返ってきた答えは実に意外な物だった。
「俺な、キョウカツされてたんだ」
「キョウカツってあの『恐喝』？」
「そう、あの恐喝。だから他にどのキョウカツがあるんだよ」
「だ、誰から？」荒太は再び当然の疑問を口にした。すると更に意外な答えが返ってきた。
「オッサンだよ」
「オッサンってあの『オッサン』？」
「そう、あのオッサン。他にオッサンが―いるか。とにかくあの国乙三郎だよ」
「う、嘘だろ？なんであのオッサンが？お前ら友達だったんじゃないのか？」
「少なくとも俺は友達だと思ってた。でもあいつは違った。オッサンてな。高校卒業して大学にも行かないで、仕事もしないで、いわゆるニートだったんだよ。それでちょうど半年ぐらい前かな。偶然、街で再会したんだ。それで一杯やりに行こうって話になってな。つい調子に乗って飲み過ぎちまってさ。うっかり喋っちまったんだよ。俺が比奈子殺したんだって事」
荒太は頭が混乱してきた。
「ふ、普通喋らないだろ。どんだけ酔っ払ったって」
「罰が当たったんだろうな。神様が酒に自白剤入れたみたいな」

「それで？オッサンはなんて？」
「その夜は『冗談だろ』って感じで何も言わなかった。でも次の日から恐喝が始まった。最初のうちは遊ぶ金欲しさで金額も大した事なかった」
「でも、それ従う必要なかったんじゃないか？仮にオッサンが警察に言ったとしたって酔った上での自白だけじゃ―」
「俺、意外と臆病なんだ。警察が虱潰しに捜したらいつどこから物的証拠が見つかるかわからないだろ？それ以前に警察に尋問されたらすぐ『はい、私がやりました』って言っちまいそうだからな」
「そんなもんか」そんなもんか？
「でな、オッサンの恐喝もだんだんエスカレートしてってな。ついに体を求めてきやがった」
荒太は体が固まった気がした。オッサンはくずだ。人間のくずだ。
「それで、どうしたんだ？」
「さすがに限界だと思った。それで時間をくれって頼んだ。そこから先はお前も知っての通りさ。まず玲奈に比奈子の死の真相を打ち明けた。それで自首するための心の準備してたんだけど北条の奴が物凄い手際のよさで同窓会なんて企画するだろ。これで最後だと思って参加する事にしたんだ。柄にもなくカラオケまで行ってな。それで明日―本当だぜ―明日、警察に行くつもりだったんだ。そこでお前のこの電話だろ？いいタイミングだったよ。言っときたい事、全部言えたしね。この村の警察は何かと伏せたがる傾向があるからな」
「例えば？」
「比奈子の死因。首吊りだったって事は伏せてただろ？お前みたいに近しい人間は知ってただろうけどな。だから昨日は口が滑ったと思ったよ」
「ああ、そう言えば」違和感の正体はこれだったか。
「まあ、俺が自首すればオッサンの奴も恐喝罪で逮捕だ。地獄の底まで道連れだよ。ハッハッハ」

そう上手く行くだろうか。というか笑い事じゃないだろう。そう思ったが口には出さなかった。
「まあ笑い事じゃないけどな」急にロートーンになった。こいつも読心術を使えるのか。
「お前、明日、東京に帰るんだろ？だったら北条には絶対に連絡しとけよ。見送りに行きたがるだろうからな。いいか。あいつは絶対にお前の親友だ。裏切られた事がある俺が言うんだから間違いない」
「わ、わかってるよ」荒太は噛み締めるように言った。
「ああ、それと最後に言っときたいんだけどさ」
「何だ？」
「俺、お前の事、すげえいい奴だと思うよ。比奈子の事だって恨んだりはしないからさ」
数秒の間があった。
「サンキューベイベーとだけ言っとくよ。じゃあ、バンド頑張れよ。元気でな」そう言って吉行は電話を切った。
翌日、朝一で吉行は警察署へ、荒太は雪白駅へ向かった。

終章

終章

「だー、お前遅えよ。なんで今日に限って5分前行動なんだよ。これじゃあ見送りの価値半減だろ」
「これからは盆と正月は帰る事にしたんだよ。それならすぐ会えるだろ」
「何だ。それならいいか。て、そんな事言ってるうちに電車きちゃったよ。また一緒に遊ぼうな。バンド、異国の地から応援してるからな」
「東京は異国ではない」それだけツッコんで荒太は電車に乗り込んだ。
「お前も元気でな、親友」そう言うとドアが閉まり音を立てて電車は走り出した。
2泊3日とは思えないほどいろんな事があった。でもそれらは全て過ぎた事。これからはまた大好きな音楽三昧の日々に戻る。それでも込み上げてくるこの感情はなんだろう。今ならいい曲が書ける気がして荒太は鞄からノートを取り出した。なんだか早くギターが弾きたくなった。早く東京に着けーと願っているうちに眠ってしまっていた。夢に比奈子が出てきた。夢の中で比奈子は笑っていた。やわらかな優しさを湛えて静かに笑っていた。
目を覚ますと頬が濡れていた。そして荒太は東京に帰ってきた。
圭一はいつもと変わらぬ素振りで出迎えてくれた。
「おかえり」
「ただいま」とりあえず部屋に入って「プハー」と体を大の字にした。
「なんだよ。なんかお前、目が赤いぞ。向こうでいろいろあったんだろうな」

「いい事も―悪い事も―」
「そうか。まあ、それはいいとしてお疲れのところ悪いんだけど明日、スタジオ入るぞ。新曲作ろうって話になってんだ」
荒太はむくっと起き上がった。
「それはグッドタイミングだ。実は電車の中で一曲書いてきたんだ」
「おお、マジでか。今度のライブでやろうぜ。今日は荒太が帰ってきた記念で乾杯だ。
「オレンジジュースでか？」
「ボーカリストは飲んじゃいけませーん」
そう言って2人で笑った。
それから1週間後、ライブハウスは今日も満員だった。一曲目からいつも通りの盛り上がりを見せるノクティルカ。ただいつもと違うのは荒太の声が妙に籠っている。涙ぐんでいるように聴こえる。
「おい、荒太、大丈夫か？」
もうライブもラスト一曲といったところで圭一が声を掛ける。客席からも心配する声が響く。数秒の間が空いた。
「大丈夫、人生には―人生には悲しい事がたくさんある。でも、でもそれ以上に楽しい事もたくさん待ってるんだ」
唐突なMCに客席がざわつく。だがメンバーは何かを感じ取ったらしい。再び4人が一つになる。
「次で最後の曲です。新曲です」荒太ははっきりとした口調で言った。
客席から再び大きな歓声が上がる。
「えー、タイトルは・・・『鎮魂曲』」
圭一のアルペジオと観客の歓声が重なる。もうすぐで春が来る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3055y/

春の足音は鎮魂曲

2011年11月20日18時48分発行